

日本獣医師会雑誌 通巻 900 号 発刊記念連載特別企画

—各分野で活躍する獣医師のさらなる飛躍に向けて (区)—

小動物臨床分野における教育の充実と将来展望

岡野昇三[†] (日本獣医師会獣医学術学会誌編集委員会副委員長・
北里大学獣医学部教授)

1 はじめに

入学試験の面接に際して「獣医師になろうと思ったきっかけは何ですか?」と質問すると「飼っていた動物が病気になった時に助けてくれた獣医さんの姿に憧れて獣医師を目指すようになりました。」と回答する受験生が非常に多く認められる。その要因は、獣医師と一般の方々とは接する機会として最も多いのが小動物の臨床現場(動物病院)のためではないだろうか。獣医師としての仕事は多岐にわたっているが、この動物病院での獣医師への印象が、良くも悪くも獣医師全体のイメージを構築してしまう可能性がある。単に見た目だけの印象を良くすることではなく、真に小動物臨床獣医師として尊敬される獣医師になることが求められる。現在、大学卒業後の進路として新卒者の約40%が小動物病院に就職しており、北里大学では約70%を占める年度もある。大学は、一人でも多く社会に貢献できる優秀な人材を輩出する責務を担っており、そのためにも小動物臨床の教育の充実は必要不可欠である。そこで、本稿では大学における小動物臨床分野の教育(卒前・卒後)について充実と将来展望について考えてみたい。

2 参加型臨床実習

2017年から正式に共用試験(vetCBT, vetOSCE)が実施され、合格した学生はStudent Doctorとして参加型臨床実習で簡単な診療を行うことができるようになった。それまでの臨床教育では、症例に対して学生が診療を行うことが一切認められておらず、病院での実習は見学のみであった。参加型臨床実習を通して基本的な診療行為(問診、採血、注射など)を習得できるようになり、これまでの学生以上に卒業時点におい

て必要な最小限の臨床スキルは向上している。さらに、vetOSCEの試験項目の一つとして医療面接があることにより、飼い主さんとのコミュニケーション、身だしなみや言葉遣いなどへも以前に比べて注意を払うようになってきている。

参加型臨床実習の単位数や開始時期などは大学間で若干の差はあるが、5年生前期または後期から開始されている。北里大学では5年後期(ベーシック)、6年前期(アドバンス)に参加型臨床実習を実施している。6年前期の実習(アドバンス)では、学生の希望により附属動物病院以外でも指定された学外施設で実習を行うことを認めている。学外施設として協力病院(約60動物病院)と連携し、学生教育に当たっている。特に、附属動物病院では経験することが少ない予防獣医学(ワクチン接種、避妊去勢手術)などを中心に幅広く実践的な経験ができるように配慮をして指導していただいている。

さらに、動物病院以外でも青森県と協定を結び動物愛護センターでの保護動物への避妊去勢手術及び簡単な処置を行うことを可能にしている。動物病院に来院した症例の利用には制限がある場合が多いため、シェルターを利用した実習をさらに充実させる必要がある。学生も保護動物に対する関心が高く、実習に取り組む姿勢も真剣である。

参加型臨床実習は、今後ますます臨床教育の中心を成すことが予想され、実習時間の増加、さらなる少人数グループでの実施、実施する診療範囲の拡大(現時点よりも少し侵襲性の高い医療行為)など指導教員の負担が増加する可能性がある。臨床系教員の増員を図るなど対応はしているが、十分であるとはいえないのが現状である。

3 生体を利用した臨床教育

獣医学教育を取り巻く環境として、生体を使用した教育・研究に社会から厳しい目が向けられている。大学と

[†] 連絡責任者: 岡野昇三 (北里大学獣医学部獣医学科)

〒034-8628 十和田市東二十三番町35-1 ☎0176-23-4371 E-mail: okano@vmas.kitasato-u.ac.jp

しては、動物に自信を持って触れることができる卒業生を責任を持って送り出すことは社会的使命であり、そのため、卒業までの学部教育においては生体を用いざるを得ない。一方で、これら実習に用いられる動物たちもまた、命あるものであり、その種類に応じた生態や習性等を考慮し、実習の目的の範囲の中で、適正に取り扱われなければならない。各実習においては、その実習目的を達成する範囲において、動物たちの苦痛を削減し、あるいは、軽減することを目的として、「3Rs」を徹底する必要がある。また、実習時間以外の時間は、動物たちにとっての安息の時間であることを認識し、「5つの自由 (5Fs)」の原則の実践をすることで学生のみならず社会から信頼される教育を行うことができる。

教育での生体利用数を減らす一つの方法がスキルスラボの充実である。スキルスラボの充実及び活用は、今後の獣医学教育において重要な役割を果たすことは間違いない。臨床実習など生体を用いる前に基本的な手技を十分に理解・修得することは必要不可欠である。ほとんどの大学でスキルスラボを設置しており、採血キット、縫合キットなどをはじめ各種シミュレーターなどが利用可能である。参加型臨床実習の実施前に、基本的な手技を確認するために利用している。しかし、獣医学教育向けに利用可能なシミュレーターは限られており、さらに価格も高いので自作できるものは自作して利用しているのが現状である。そのため、安価で利用可能なシミュレーターの開発、VR 機器を利用した教材作成などは、大学間さらには企業とも協力して行っていくことが求められる。

4 国際認証

近年の獣医学教育の大きな流れに国際認証取得のための改革がある。教育の質を認証する制度として欧州の国際認証 (EAEVE) を鹿児島大学・山口大学、北海道大学・帯広畜産大学が共同して取得している。国際認証を取得するための過程 (努力) は、獣医学教育の教育水準を高めるためには有効な手段である。特に、国際認証を得るためには、これまで以上に臨床教育の充実が求められており、臨床教育の改善の大きな起爆剤であることは疑いない。しかし、国際認証取得を目指すには、多くの課題があるのも事実である。大きな課題として学生数に応じた教員数の確保、動物病院での実習時間、産業動物 (特に馬) の診療、夜間診療の実施などソフト面・ハード面ともかなりハードルが高いのが実情である。

5 コミュニケーション教育

新型コロナウイルス感染症のまん延により臨床教育のみならず獣医学教育全体が大きな影響を受けた。多くの大学で約2年間、校内への立ち入り制限やオンライン授業を基本として対応が行われてきた。そのため、学生は

同級生とも会うことがなく、また友達を作る機会さえも失ってしまった。さらに、クラブ活動やアルバイトなどさまざまな年齢層や社会的背景の異なる人たちとの交流の場を失ってしまった。小動物臨床では、飼い主さんへの問診に始まり、さまざまなコミュニケーションを取らなければ、診療は前に進んで行くことができない。また、十分なコミュニケーションが取れないため、場合によっては訴訟などに発展するケースもある。小動物臨床は、獣医師の職域の中でも特にコミュニケーションが重要である。そのため、獣医学教育の中でも医療面接実習が取り入れられている。医療面接実習は、言語・非言語の意味や飼い主さんにどのように受け取られるかなど基本的なコミュニケーションについて学ぶものである。実際に北里大学では、性別や年齢などが異なるボランティアの方に来ていただき、学生は緊張しながら問診などを行っている。医療面接実習は、他の実習に比較して時間と手間はかかるが、教育効果の高い実習であると思われる。

6 チーム獣医療

愛玩動物看護師法の成立により、愛玩動物看護師ができる診療補助が規定され病院内での役割分担が明確化されたことで、小動物臨床の現場でチーム獣医療の充実がさらに求められている。小動物病院の1病院当たりの従業員は5名程度との報告がある。小動物病院の約85%が獣医師1、2名であることを考えると愛玩動物看護師は3~4名いることになり、愛玩動物看護師がいなければ小動物病院は成り立たない。そのため、以前にも増してチーム獣医療の充実が必要不可欠である。

医学領域では、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師などがお互いにサポートをして診療に関与している。医学領域ではあるが、北里大学ではチーム医療演習として医学部・看護学部・薬学部・医療衛生学部 (臨床検査技師など養成) の学生がグループとなり、さまざまなシチュエーションを想定して診療を進めるためのグループディスカッションや発表が行われている。将来的には、獣医学領域においても同様に大学の臨床教育で獣医学生と動物看護学生とが症例をどのように治療・管理していくかをディスカッションしながら進めていく演習・実習が行われることが予想される。

7 卒後臨床研修

高度医療という社会ニーズに応えるために専門医教育 (スペシャリスト) がクローズアップされ、学会や任意団体が認定医・専門医制度などを設立している。また、日本獣医師会でも「認定・専門獣医師協議会」を設置して検討が進められている。一方、臨床研修について、獣医師法第十六の二では「診療を業務とする獣医師は、免許を受けた後も、大学の獣医学に関する学部若しくは学

科の附属施設である飼育動物の診療施設又は農林水産大臣の指定する診療施設において、臨床研修を行うように努めるものとする。」と記載されている。しかし、努力目標とはいえ、毎年400名程度が小動物診療獣医師として新たなスタートを切っているにもかかわらず十分な手当がなされていないのが現状である。日本獣医師会でも獣医師生涯研修事業を行っているが、小動物臨床の底上げを図るためには卒後教育（ジェネラリスト）にさらに目を向けていかなければいけない課題ではないだろうか。

8 女性が活躍できる小動物臨床

獣医学系大学に入学する女性の比率は近年上昇傾向にある。北里大学でも在學生は女性の割合が高く、2022年度入學生の65%が女性であり、30年前と比較して男女比が逆転している。このことに伴い、小動物臨床分野に就職する女性の人数も増加している。しかし、結婚、出産、育児などで十分に能力を発揮できていない現状がある。さらに、動物病院の獣医師数を見てもと獣医師

1名または2名が約85%を占めており、産休等を取りにくい環境がある。日本獣医師会では、女性獣医師応援ポータルサイトの作成などを通して就業環境整備に尽力されているが、安心して小動物臨床分野に卒業生を送り出せる環境を整えていただくことをお願いしたい。

9 最後 に

18歳人口の減少、農学系志願者の減少などの結果、獣医学科の志願者も残念ながら減少している。獣医学科の志願者を確保するための一つとして、獣医学・獣医師の魅力などを積極的に伝えていく必要がある。また、将来的な志願者を増やすために小中学生への体験学習などを通して興味を持ってもらうことも大切である。大学の大きな責務は優秀な獣医師を輩出することであり、そのために獣医学教育を改善・改革していくことは必要不可欠であることはいうまでもない。小動物臨床を充実させるには多くの課題があるが、これらの課題の解決には日本獣医師会をはじめ農林水産省、文部科学省のさらなるサポートをお願いしたい。